



## GHQ史観による 呪縛からの解放を

# WGIPと「歴史戦」

高橋史朗著

本人自らが自らの過去を徹底的に否定するやうに熟度高く仕組まれたプロパガンダである。

日本のすべての日刊紙に「太平洋戦争史」を掲載させ、「南京大虐殺」や「マニラの虐殺」など旧日本軍の残虐性を際立たせる報道を強要する一方、自らの原爆投下や東京大空襲などについては、「悪」の指導者から日本人を救出するための致し方のない選択だった、といった論法が用いられる。NHKの第一、第二放送で「真相はかうだ」といふ定時番組を開かせ、「太平洋戦争史」の同工異曲を繰り返し放送させた。戦後の日本人にとつての何よりの楽しみであった映画でも、戦争犯罪への憎しみを煽るやうな類のものも多く上映させた。

とは、GHQによって出された「戦争についての罪悪感を日本人の心に植ゑ付けるための宣伝計画」と呼ばれる洗脳プロパガンダのことである。WGIPについての研究や論説が引き続きなされねばならないのは、このプロパガンダが現在に生きる日本人の心をなほ深く縛り付けてゐるからである。

中国や韓国から、時にアメリカからさへも発せられる戦前期日本の「邪悪な歴史」に対して、日本人はまっとうに反論できず、むしろ自虐的に過去を顧みる思考から抜け出せないでゐる。その深層の理由は、日本人がWGIPによる巧みな「マインドコントロール」から依然として解放されてゐないからである。

本書から浮かび上がるWGIPの巧妙性とはどんなものか。積極的に日本人を洗脳するといふより、新聞、ラヂオ、映画、書籍などを通じて、日

マスコミは「プレスコード」といはれる厳しい「事前検閲」を押し付けられ、国民にはそれがGHQの意図だとはまったく気付かされることなく、むしろ日本人自身が自主的にそのやうに報じてゐるのだと思はせる高度の巧妙性、これがWGIPの際立った特徴である。WGIPの淵源が、中国共産党の根拠地・延安での日本兵捕虜洗脳計画教育にあり、それに日本共産党の幹部までが加はつてゐたといふ本書の記述などを読んでゐると、そもそも戦争といふものは「正義と邪悪」といった単純な観点からは到底これを語るができない、何か慄然とした感覚を覚えずにはゐられない。

〈本体2000円、モラロジ―研究所刊。ブックス鎮守の杜取扱書籍〉  
〈拓殖大学学事顧問・渡辺利夫〉